

図書館新聞

ビブリオバトル結果報告

7月12日(月)、第十一回ビブリオバトルを大教室で開催しました。

今回は8名の参加者が集まって書評を競い合いました。聞き手を前に緊張で言葉がうまく出でない場面もありましたが、それぞれが本の概要や登場人物の魅力、心が動いた場面を紹介しました。質疑応答の時間では、聞き手から「一番感動した場面はどこですか」といった質問や「以前から気になっていた本だったので、紹介が聞けて良かったです」など質問や感想があがっていました。先生からの「みなさんはどんな風に本を読めるようになりましたか」という質問には、「登場人物に自分で俳優をキャスティングして、動かしながら読んでいます」、「登場人物の心情を想像しながら読み進めています」との答えがありました。

投票の結果、今回のチャンプ本は中1Cの高橋さんが紹介した『ハリーポッターと賢者の石』に決まりました。映画化もされた児童書の世界的大ヒット作品のシリーズ1冊目です。



今回のビブリオバトルで紹介された8冊です

- ・町田そのこ 『52ヘルツのクジラたち』(中央公論新社)
- ・原作:藤本ひとみ 文:住滝 良
探偵チーム KZ 事件ノートシリーズより
『アイドル王子は知っている』(講談社)
- ・百田尚樹『永遠の0』(講談社)
- ・グレッグ・マキューン『エッセンシャル思考』(かんき出版)
- ・文:おかべたかし 写真:山出高士『くらべる東西』(東京書籍)
- ・東川篤哉『新 謎解きはディナーのあとで』(小学館)
- ・横山光輝『三国志』(潮出版社)
- ・J.K.ローリング ハリーポッターシリーズより
『ハリーポッターと賢者の石』 ←チャンプ本

前期図書委員のみなさんへ

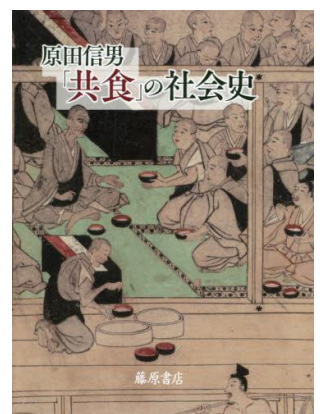
前期図書委員のみなさん、おつかれさまでした。クラッシーでアンケートを出していない人は提出を忘れないようにしてください。

後期図書委員になった人へ

コロナの感染拡大防止の観点から、全員で当番をする形から、クラッシーを通して原稿を提出してもらうことが中心になるかと思えます。本の整理、本の装備、新しい本の選定などの活動は、これらの活動に興味あるかどうかもクラッシーで聞いて、指定した日に人数を絞って来てもらおうと思っています。クラッシーを使える状態にしておいてください。

クラス	9月	年間冊数	クラス	9月	年間冊数
中1A	2冊	42冊	高1A	5冊	34冊
中1B	12冊	145冊	高1B	0冊	8冊
中1C	143冊	940冊	高1C	0冊	4冊
中1D	5冊	44冊	高1D	4冊	68冊
中2A	2冊	27冊	高1E	0冊	2冊
中2B	1冊	18冊	高1F	3冊	16冊
中2C	1冊	27冊	高2A	9冊	66冊
中2D	14冊	85冊	高2B	8冊	53冊
中3A	2冊	20冊	高2C	2冊	26冊
中3B	8冊	76冊	高2D	13冊	141冊
中3C	8冊	34冊	高2E	1冊	27冊
中3D	9冊	73冊	高2F	0冊	0冊
中3E	9冊	45冊	高3A	3冊	19冊
			高3B	1冊	18冊
			高3C	6冊	16冊
			高3D	3冊	22冊
			高3E	0冊	21冊
			先生	16冊	84冊
			合計		2201冊

中1C さすがです！引き続きどんどん本を読んで欲しいです！
他学年もたくさん本を読んで新しい発見をして欲しいです
(前期図書委員長 永原さんより)



今回紹介する本は「共食の社会史」です。

先日、図書室を黙食場所として提供するために、黙食中という貼り紙を貼ったのですが、ある先生から黙食という単語はあるんですか？ということと言われ、確かにそうだなと思ったのがきっかけです。その時に日本人はいつから食事を共にする文化を始めたのだろうか？と疑問に思いました。もしかしたらその答えがこの本に載っているかもしれないかと思っています。

この本によると、6世紀頃から日本では共食がはじまっていて、心を通じ合わせた仲間をあらわす「一味」という言葉も、中世の頃にできたそうなので、共に食べることによって生まれた文化や風習、言葉があるようですね。コロナ禍に個食となった現代、共食の大切さを感じるのがみなさんも多いのではないかと考えて、紹介しました。
(図書館の担当 竹内より)

図書委員のコラム

前期は図書委員会のボランティアとして活動していました高1の野澤です。一応中学2年生の頃から図書委員会として書記をしていました。後期は図書委員として復帰する予定です。

ところで、今回の総裁選で新しい総裁が岸田さんに決定しました。コロナ禍の中で私たち学生をはじめ、たくさんの人たちの生活が大きく変わってしまったので、岸田さんには頑張っていたいただきたいです。一刻も早く、普段の生活に戻りたいと切実に思います。

普段はふざけてばかりなので、たまには少し真面目なお話を。(高1A野澤春陽さん)